

加藤周一文庫公開講読会『羊の歌』を読む

「戯画」

立命館大学客員協力研究員 猪原 透

【本章の梗概】

前章では第一高等学校の寄宿寮での生活を通して加藤が実感した「日本式小集団」の特質が描かれた（主題：「秩序」のあり様）が、これに対して本章では第一高等学校の師友を通して西洋文学や音楽、映画との出会いが描かれている（主題：「文化」のあり様）。

当時の第一高等学校は、受験対策用に編集された教科書を用いた中学校までの教育とは対照的に、教師が最高級の書籍と認めたものを教科書として用いていた。教師たちは学生の力量に配慮せずそうした書籍を用い、また解説も不足していたため、教師との対話が成り立たないこともしばしばみられた。その反面、学生側の関心がそうした教育と呼応した場合には、濃密な人間関係が生まれ、問題意識が飛躍的に深まることもあった。加藤にとって片山敏彦や五味智英との出会いはその実例であり、片山は西洋文学に向けて開かれた窓であり、五味は日本古典文学に関する自身の知識の不足を痛感させるきっかけとなった。本章の後半では加藤と歌舞伎・演劇・音楽との出会いが論じられる。歌舞伎についてはその「芸」にひかれ、「科白の意味」や「芝居の筋」は問題ではなかったという。一方、演劇については科白や登場人物の心理にひかれ、「芝居とは何であり得るか」を発見したという。

前半・後半それぞれで西洋的要素（フランス文学・演劇）と日本的要素（万葉集・歌舞伎）がとりあげられるが、当時の加藤にとってそれらの理解は一面的なものにとどまっていた。「印象派以後の絵画」「浪漫派の音楽」が西洋の絵画・音楽の一部分にすぎないものであることを知らずに受容し、『万葉集』を読む一方で「儒仏の事」については何等の知識もなかった。それは「日本の伝統的な文化を忘れさせるには充分で、西洋の文化を理解させるには不十分」な当時の文化状況を忠実に反映した「戯画」であったという。

【第1パラグラフ】第一高等学校のエリート教育

駒場の高等学校は、寄宿寮にその古い習慣を維持しようとしていたばかりでなく、教場でもその「伝統」に忠実であった。学生は一年の授業の三分の一以上を休んではならないとされていたが、出欠をとる教師は、一人の学生が欠席した仲間の代りに返事をするのを——私たちはそれを「代返」と称んでいた——黙認していた。教場へ出るのも、出ないのも、学生の自由であり、教師の側が学生の顔色をうかがうということもなかった。みずから教える値うちがあると思うことを教えて、そのための予備知識は学生が何とか工夫して備えるだろうということをたてまえとしていた。物理学の教師は、学生が数学にどの程度慣れているかということのを考慮しなかった。ドイツ語の教師は、三か月間初歩の文法を説明すると、ただちに古典の訳読をはじめた。それは泳げない子供を水のなかに放りこんで、泳ぎを自得させる教育法に似ていた。

(1) 第一高等学校の「伝統」

・加藤周一の在学期間は1936年4月～39年3月。校長は森巻吉^{けんきち}（37年4月まで）、橋田邦彦（37年4月以降）。

・加藤が入学する前年に一高は本郷から駒場に移転。そのことはかえって一高の「伝統」に対する意識を強めたが、意識的に演じられる「伝統」はいくらか滑稽に見える。

「私は〔一高の〕伝統に反抗する代りに、「愚にもつかぬその形骸を無視するより他はなかった」（「故郷と伝統と」『青春ノート』1938年11月7日）

・1938年11月11日付『向陵時報』に橋田邦彦校長の「伝統」という論考が掲載されている。

(2) 「代返」

・一高の教育方針はエリートの養成。そのために以下の方法を用いた。

①自発性の尊重。指示や強制を受けないと動けないようでは、エリートとは言えない。

②去る者は追わず。脱落者の存在は残った者が自発的に参加していることの証明である。

③最高級の書籍を教材にする。「リーダー」の類は雑書にすぎず、最高の書籍を使い学問の本場の雰囲気を感じあわせることが肝要である。

・ただしこうした厳格な教育についていけるのは少数であり、多くの学生は受験を突破する学力はあっても、最高級の書籍をいきなり読み解けるほどの学力はもっていない。

⇒ エリート教育の理想と高等学校の現実の妥協として、「代返」の黙認が必要となる。

(3) 「物理学の教師は……ドイツ語の教師は……」

・物理学の教師：石谷伝市郎か？¹ ドイツ語の教師：後述する岩元禎を指すが、他の教師も似たり寄ったり。

・中村真一郎の回想：「新たにはじめたフランス語は、一ヶ月で文法をあげ、翌月から短編小説を読みはじめるというスパルタ式教育だった」²

彼らはむしろ学生が物理学やドイツ語を身につけることを願っていたが、それが不可能であっても、「本物の学問」の雰囲気を感じとれば良いと考えていた。スパルタ教育の反面、「学問の場を共有する仲間」として学生を対等に扱う風潮も強く、教師が学生を自宅に招いたり、貴重な研究書を貸し与えることもしばしば見られた。

そうした悠長な教育が成り立ったのは、一高に入れば（どこかの）帝国大学にはまず入れるという、受験圧力の弱さゆえ。

¹ 『第一高等学校一覧 昭和12年至13年』（第一高等学校、1937年）。

² 中村真一郎『私の履歴書』（ふらんす堂、1997年）41頁。

【第2パラグラフ】影響を受けられなかった教師①——日本人による西洋文化の授業

夏目漱石がその小説のなかで「大いなる暗闇」と称んだ哲学の岩元教授は、その頃私たちにドイツ語を教え、浪漫派の小説を読んでいた。高齢で、背中も曲り、二階の教室へ行く階段を登るのにも、ゆっくりと這うようであったが、痩せて皺の深い顔のなかの唇だけは赤く生々としていて、妙に肉感的な印象をあたえた。学生にドイツ語の小説の一節を訳させてから、その誤を正す。「それはちがうな」としわがれた声で、呟くようにいった、「それはかの女が、かの男に、懸想したということじゃ」。その他の説明は一切なかったから、初等文法三ヵ月の知識では、なぜそういう意味になるのかよくわからなかった。教場での質問は禁じられていた。試験では半分以上の学生が落第点をとった。

(1) 岩元教授について

・岩元禎（1869－1941）。『三四郎』に登場する「広田先生」のモデルとする見方が一高生の間にあつた。なお「広田先生」は小説中で「偉大な暗闇」と呼ばれている。

・岩元はドイツ語を担当。哲学を担当していた時期もあつたが、生涯1冊の本も書かなかつた（＝「広田先生」と同じく自己表現に無関心で、外からは内面をうかがい知ることができない）。ただし書物を通して西洋文化の奥深さを知り、それを極めることに一生をかけた「偉大なる」人物でもあつた。

・このとき加藤が読んだという「浪漫派の小説」が何であつたかは不明。1938年に一高に入学した大野晋は、岩元のドイツ語でアーダルベルト・シュティフター「石灰石」*Kalkstein*を読まされたことと、次のようなエピソードを伝えている。

「先生は出欠を取り、名簿で出席者を数えた上で実際の教室の生徒の頭数を数える。普通こうしたことは「代返」を防ぐためになされるものである。しかし岩元先生は「坐っている生徒の数が返事の数よりも多いかもしれない、多ければそれを追い出そう」と思っておいでなことがその眼光、挙措から明白に知られた」⁴

(2) 「痩せて皺の深い顔のなかの唇だけは赤く生々としていて……」

・次のパラグラフに現れるペツォルト教授との対比か（静⇄動）。日本語で解説するがドイツ語の理解につながらない岩元と、ドイツ語で解説するが日本語に結びつかないペツォルトの対比。どちらも独特の言語感覚（岩元の「懸想」、ペツォルトの日英独が入り混じった罵倒）の持ち主として描かれている。

・対話が成り立ちがたかつた岩元・ペツォルトと、対話が成り立った片山・五味の対比。

(3) 「教場での質問は禁じられていた。試験では半分以上の学生が落第点をとった」

・「[岩元]先生にはいろいろの伝説があつた。先生の哲学の講義は採点がきびしく、クラ

³ 高橋英夫『偉大なる暗闇』（講談社文芸文庫、1993年）。

⁴ 大野晋『日本語と私』（河出文庫、2015年）104頁。

スの大半が落第点をとったので教務課が困ってひそかに点数をふやしたことがあるとか」⁵。

一高の落第点は59点以下。4科目落第すると留年が決まる。

・「最高級の本を読む」ことは、たとえ理解できなかつたとしても（学問の雰囲気を感じさせるという意味で）最高の教育だという一高的エリート教育を体現していたのが岩元。

【第3パラグラフ】影響を受けられなかった教師②——外国人による日本文化の授業

日本に長く滞在し仏典の研究で本国に知られていたペツォルト教授は、作文を教えていた。しかし私たちには教師のいうことがほとんどわからず、また私たち自身がドイツ語で何か意味のあることを作文できるはずもなかった。私たちは退屈して、その授業に「代返」を活用し、「代返」のために出席した者さえも他の本を机の下で読んでいた。ペツォルト教授は、教壇から降りて来て、学生の手から隠した本をもぎとり、頭上に振り廻しながら、大声でまくしたてることもあった。しかし私たちには、白髪の西洋人が激怒しているということがわかるだけで、何を言っているのか全く見当もつかない。その無駄骨折りに気がつくとき、老人は英独日本語を混ぜて「おまえたちは偉い人ではない」といった、《You are nicht erai hito!》——ペツォルト教授は、ほとんど日本語を話さなかつたし、私たちはほとんど全くドイツ語を解せず、また仏教に何らの興味ももっていなかつた。受けとり得たかもしれない深い影響を、私たちが受けとる道は閉されていたのである。私がペツォルト教授を思い出したのは、その後二十年以上も経ってからのことだ。そのとき私は、ミュンヘンの大学で、学生たちに「正法眼蔵弁道話」をドイツ語で説明していた。もし私のペツォルト教授に出会うことが二十年早すぎなかつたら、日本仏教について話しあうことがあったかもしれないし、一種の親交さえ成りたっていたかもしれない。しかし二十年まえの私の精神的な世界は、二十年後の私の説明に耳を傾けていたドイツ人の学生ほどにも、成熟してはいなかつた。

(1) ペツォルト教授について

・Bruno Petzold (1873-1949)。シレジア出身のジャーナリスト。1911年に来日し、1917年から43年まで一高でドイツ語を教えた。来日後に仏教に関心をもち、「ゲーテと大乘仏教」「天台教学の精髓」などの論文を書いた。

・仏教学者・中村元もペツォルトの授業を受けたという。「ペツォルトの授業は、小学校の教科書をドイツ語に翻訳するという内容だった。その授業の中で、ペツォルトはよく仏教についてドイツ語で語った」⁶。

(2) 「受けとり得たかもしれない深い影響を、私たちが受けとる道は閉されていたのである」

・ペツォルトの業績はある種の比較思想史であり、外国語への翻訳を通して日本思想を理解するという点も含めて、のちの加藤に近い。しかしこのときは何らの影響を受けることも

⁵ 同上、103頁。

⁶ 植木雅俊『仏教学者中村元』（KADOKAWA、2014年）23頁。

なかった。後段で述べられているように、当時の日本の「西洋化」は「日本の伝統的な文化を忘れさせるには充分で、西洋の文化を理解させるには不十分であった」。

(3) 「私がペツォルト教授を思い出したのは、その後二十年以上も経ってからのことだ」

・1964年に短期間、ミュンヘンの大学で教えていたときのことを指す⁷。

・ちなみに、当時の一高校長であった橋田邦彦は、生理学者であったが、道元『正法眼蔵』の注釈によっても知られていた。のちの加藤の回想によると……

「[矢内原教授の軍部批判を一高で聞いて] 他方、本郷の大学医学部の生理学者、橋田邦彦教授は、第一高等学校の校長に転じ、前項の学生へ向けて特別講義を行った。私はその講義にも出席したことがあり、『正法眼蔵』の詳細な注釈者でもあった橋田教授が、科学と禅と「聖戦」の一体となった円を、黒板に描くのを見た。しかしその説明を私は理解することができなかった。私に理解できたのは、「不拡大方針」を唱える近衛内閣が止め度もなく拡大していく戦争を、この人が熱心に支持していて、われわれ学生にも支持をすすめているらしいということだけであった。／要するに当時の駒場には、さまざまな意見と考えとが共存していて、そのことから私は強い印象を受けた。私が通っていた中学校にはそういうことがなかったし、駒場の寮と教室の外の社会も、少なくとも新聞雑誌にあらわれたかぎり、誰も彼もが同じ立場に立っているように見えた」⁸。

【第4パラグラフ】影響を受けた教師①——西洋文学

詩人の片山敏彦教授は、教科書にベルグソンの「形而上学序説」の独訳を用いた。「これは翻訳ですが、内容が実に面白いです」と片山教授は少し弁解するようにいった、「疑問を生じたときには、フランス語の原文を参照しましょう」。しかしドイツ語を三ヶ月習っただけの私たちのなかに、フランス語を読める者は一人もいなかった。片山教授の授業は親切だった。教科書の内容は、私にわかったかぎり、たしかにおもしろかった。片山教授は、ベルグソンとその考えを説明するために、独仏の詩人や哲学者の名まえを数かぎりなく引きあいに出した。その名前名の大部分を私は知らなかったから、彼らとベルグソンとの関係が、どれほど密接なのか、どれほど漠然としたものであったのか、私にはわからなかったが、それらの名まえは、少し甲高くせきこんだ声に乗って、実に甘美に、遠い理想の国の町の名まえのように、私の耳に響いてきた。話す人の愛情——ともしそれを称ぶとすれば——は、聞いている側にも伝わらずにはいなかったのであろう。異国の文人墨客にそれほどこまやかな愛情を捧げた——あるいは捧げていると思うことのできた人が、中国の文人に傾倒した江戸時代の儒家の後に、果たして他にあつたらうか。片山教授は若い時に西洋に遊学し、旧知の彫刻家高田博厚を通じて、ロマン・ロランを訪ねたことがあり、ロランを崇拝すること

⁷ 鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』（岩波書店、2018年）152頁。

⁸ 加藤周一「中村真一郎、白井健三郎、そして駒場」『「羊の歌」余聞』（ちくま文庫、2011年）114—115頁。

神の如くであった。その人の著作はもとより、その周辺の詩人の本を読んで余すところなかった。またボナールの色彩を愛し、ドイツ浪漫派の旋律を好み、ロランその人と同じように、自国の軍国主義を含めてあらゆる軍国主義を憎んでいた。片山教授には、夫人と二人の子供たちがあって、中央線の荻窪の駅から少し離れた住宅街の平家に、沢山の蔵書のなかに埋もれて暮らしていた。後に私は同じ高等学校の学生であった原田義人や中村真一郎と、その荻窪の家を訪ねた。「ここへシャルル・ヴィルドラックが訪ねてきたことがあるのだ」とあるとき片山教授は生涯の重大な事件を語るようにいった、「まだ周りには一軒の家もなくてね、ヴィルドラックが尾崎喜八と麦畑のなかの道を歩いて来るとひばりが鳴いていた、ヴィルドラックはよろこんでね、これがほんとうの田舎だ、とそればかりいうのだ……」。昔の麦畑のなかの一軒家は、その頃すでに隙なく建てられた無数の小さな住宅のなかに埋もれていて、もはや容易に見つけ難いほどであった。しかし主人公の住んでいた世界が、周囲から遠く離れていたという意味では、一種の一軒家だったといえるかもしれない。「星たちが囁き交す……」と片山教授は書いたことがある。その「星たち」とは、ノヴァーリスやリルケ、ネルヴァルや晩年のオルダス・ハックスリであった。またタゴールやヴィヴェカナンダでもあったろう。その「星たち」の世界から、ヴィルドラックが荻窪の地上に降りて来ることは、その後二度とはなかった。ロマン・ロランその人も、またデュアメルやマルティネやルネ・アルコスも、無限に遠い彼方で輝いている「星たち」にすぎなかった。彼らとの文通はほとんどなかった。いくさが来たり、また去って、日仏の交通が開けた後にも、片山教授は曾遊の地に旧友を訪ねようとはしなかった。私は戦後しばらく詩人ルネ・アルコスの家に住んでいたことがある。「片山？よく知っているさ」とアルコスは例によって飲みすぎ、少しもつれ出した舌でいった、「高田と一度会ったことがある、どうしているのか、その後全く音沙汰ないね」——その片山が、日本の荻窪の木と紙でできた小さな家のなかで、当のアルコスの著作をのこらず読んでいる、という話を私はそのときにしなかった。もしその話をしていたら、アルコスは知遇に感動すると同時に、それではなぜ手紙を書かなかったのか、と煩悶したことであろう。そして私は、日本の詩人片山がパリの知人との音信を断っていたにも拘らずではなく、まさに断っていたが故に、知人の著作をのこらず読んでいたのだという事情を説明するために、ながい時間を必要としていたことであろう。

(1) 加藤周一とフランス文学

・入り口となったのは芥川龍之介。「私自身は日本語訳のフランス文学をアナトール・フランスからよみはじめた。三〇年代の初めに私は東京の中学校に通って、芥川龍之介に心酔していたから、芥川に影響をあたえた『エピキュールの園』の作者に興味をもったのにちがいない」⁹。

⁹ 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」『「羊の歌」余聞』82頁。「私はカナダで荻生徂徠を耽読し、ドイツの大学の図書館で、道元の古註をたのしんだ。そして元文部大臣橋田邦彦の『正法目蔵積意』のだめであることや、西尾〔実〕先生の『正法眼蔵』の注解の周到であることを考えた」（加藤周一「読書の思い出」『「羊の歌」余聞』77頁）

(2) 片山敏彦について

・片山敏彦 (1898-1961)。高知県出身。岡山の第六高等学校第三部 (医科) を卒業後、二浪を経て東京帝国大学の独逸文学科に入学。1925 年に高村光太郎・高田博厚・尾崎喜八らと「ロマン・ロラン友の会」をつくる。29 年から 31 年にかけてヨーロッパに「遊学」。パリの僧院派 (アベイ派) 詩人と親交を結んだほか、スイスではロマン・ロランを、ドイツではシュヴァイツァーを訪ねる。38 年から 45 年 4 月まで一高教授 (担当はドイツ語)¹⁰。

(3) 「ベルグソンの「形而上学序説」の独訳」

・Henri Louis Bergson (1859—1941)。広義の経験論に属する哲学者で、心理学や生物学にも強い関心を寄せた。「形而上学序説」(1903 年) は哲学と科学の関係がテーマ。片山が理系学生のドイツ語教科書として選んだのはそのためか。

(4) 「教科書の内容は、私にわかったかぎり、たしかにおもしろかった」

・加藤の『青春ノート』には Bergson への言及が複数みられる (近年では「ベルクソン」表記が主流で、『青春ノート』デジタルアーカイブも「ベルクソン」でキーワード登録)。

例: 「元来“笑” [ベルクソンの著作] といふ本は恐ろしく面白い本で、私等は岩波文庫の訳本が出てすぐには買ひ、よんでみると面白さに、今一度つづけてくりかえしよんだ位である」 (「時報 112 号の論説欄の編輯後記」『青春ノートⅢ』1938 年 11 月 11 日付)

(5) 「ベルグソンとその考えを説明するために……」

・「詩人片山敏彦の感受性は、芭蕉とボードレール、ドビュッシーとボナール、ベルグソンの散文のなかにさえも、共通の何ものかを嗅ぎあてるほど鋭かった」¹¹

・縦割りにされた「専門家」とは異なる横断的知識人としての片山から、加藤は思想や文学の読み方について影響を受けた。

例) 「象徴主義的風土」(1947 年) が『加藤周一著作集』1 巻に収録される際の追記: 「戦時中の読書の感想を整理して、私がこれを書いたのも、1947 年である。「象徴主義」のこのような解釈については、片山敏彦氏に負うところが大きい」

(6) 「異国の文人墨客に……」

・加藤にとっては、たとえば荻生徂徠のように、近年では中国を「わが国」と呼んだ吉川幸次郎のように、異国の文化を徹底して学ぼうとすることは日本文化の「伝統」に他ならない。しかしその流れは明治維新後の中途半端な西洋化によって断ち切られたとみる。

¹⁰ 「片山敏彦年譜」『片山敏彦著作集』第 9 巻 (みすず書房、1972 年)。

¹¹ 加藤周一「『片山敏彦著作集』(みすず書房版)」『加藤周一著作集』15 巻 (平凡社、1979 年) 290 頁。

(7) 「旧知の彫刻家高田博厚を通じて、ロマン・ロランを訪ねたことがあります」

・加藤の記憶違いで、実際には「片山を通じて」高田博厚がロマン・ロランを訪ねた。

・ロマン・ロラン Romain Rolland (1866-1944) は『戦いを越えて』(1915年)で、第一次大戦当時の作家としては珍しく反戦の立場を明確に示した。加藤は「ロマン・ロランの反戦思想とその歴史的意味」(1990年)のなかで、ロランが民族や国を越えて通用する「普遍的な価値」の存在を深く信じ、それによって「ある特定の歴史的社会的集団に固有の価値」に基づく「戦争イデオロギー」に抵抗したことを高く評価している。

・「詩人片山敏彦は、その人が師として仰いだロマン・ロランのように「擾乱を越えて」生き、狂信的な軍国日本のなかで第一次世界大戦当時のロランのように孤立していた」¹²。

「ロマン・ロラン友の会」を片山と共につくった高村光太郎や尾崎喜人が戦争賛美の詩を書いたことで、片山に対する加藤の敬愛の念はさらに高まった。

・ただし加藤は、ロランの普遍主義からは「戦争はなぜ起るのか」「どうすれば戦争は防げるのか」という実戦的な対策が出てこないことを指摘。

(8) 「私は同じ高等学校の学生であった原田義人や中村真一郎と、その荻窪の家を訪ねた」

・「その頃にはまだ多くなかった住宅街を抜け、畠のなかの一軒家に近づくと、——東京の街には軍歌が溢れていたが——ピアノのモーツァルトが聞こえてきた。〔中略〕その家のなかで主人公は独仏語の万巻の書に埋れ、夫人の弾くモーツァルトやベートーフェンを聞き、自ら水彩画を描き(ヘルマン・ヘッセのように!)談論風発して倦むところを知らず、ヨーロッパの「知的芸術的共同体」と、広い世界に向って「開かれた精神性」(ロマン・ロランが言ったように!)を説いてやまなかった。」¹³

・西洋に直接つながる窓であるが、軍歌が溢れる日本社会から精神的に孤立。その孤立を際立たせるために、『羊の歌』は片山家が「無数の小さな住宅のなかに埋れて」いたと(逆説的に)描写。

(9) 「星たちが囁き交す……」

・(報告者の調査不足のため) 出典未詳。

星たちは「無限に遠い彼方」で輝いているからこそ(粗が見えず)美しい。片山はロマン・ロランをはじめとする詩人たちをあえて「遠い彼方」に置くことで理想化し、理想化することで精神的な支えとした。この時期～敗戦直後の加藤もそうした感覚を共有。

ただしその後、フランス留学を契機に加藤が「星たち」の世界に近づいていくと、それと反比例して加藤と片山の距離は開いていった。

¹² 加藤周一『高原好日』(信濃毎日新聞社、2004年)27頁。

¹³ 加藤周一「中村真一郎、白井健三郎、そして駒場」、115—116頁。

(10)「そして私は、日本の詩人片山がパリの知人との音信を……」

・「日本の荻窪の木と紙でできた小さな家」で暮らし、周囲には軍歌が溢れる現実を徹底的に相対化するには、「普遍的価値」が必要。その普遍的価値は、フランスやドイツの歴史的社会的現実から切り離されることで(=遠くに輝く星とすることで)、いっそう「普遍的」に感じられる。

・同時に、片山の(ある意味で一面的な)西洋理解は、片山の個性だけで説明できる問題ではなく、日本文化の伝統に根差した問題であると加藤は認識していた。

「その「何故」[片山が西洋の詩人たちに手紙を書かなかったこと]を説明するためには、一人のカタヤマではなく、一つの文化を説明しなければならなかったろう、私がおのなかで生きてきた一つの文化を」¹⁴

【第5パラグラフ】片山から受けた影響——フランス文学への関心の高まり

片山教授の「星たち」は、むしろ片山教授自身から遠かった以上に、私から遠かった。私は彼らの世界と、私の世界——荻窪のぬかるみやシナそばの屋台や深夜の中央線の酔っぱらいの世界との間に、どういう関係を想像することもできなかった。しかし私は好奇心にあふれていたし、おそらく知的虚栄心にもあふれていた。私は愚にもつかぬ中学校の教科書を読んで過ごした長い時間を痛恨をもってふり返ると同時に、「星たち」の世界の探検に乗り出そうと考えた。外国語の本を早く読むことはできなかったから、翻訳を読み漁り、三日に一冊、年に百冊に及ぼうと決心した。私はその決心を実行した。日常坐臥一冊の本を携えて、僅かな暇があれば、その本の先を読みつづけるという悪習は、そのときから私の身についた。はるか後になってから、詩人アルコスは、私にいったことがある。「汝は寢床で本を読むか」「然り」「寢床では本を読むよりも大切なことが二つあるぞ、眠ること、女を愛すること……」——私は同感したが、そのとき、アルコスの寢床にも、私の寢床にも、女はいなかった。

(1)「私から遠かった」

・片山への敬愛の念と、芥川以来のフランス文学への関心が重なって、加藤も「星たち」の世界の探求へと乗り出していく。しかし、家の作りも、生活様式も、そして男女関係においても日欧の違いは甚だしかった。

・「縮図」の章で語られているように、詩や小説の創作にも乗り出していく一方、読書を通して知った文学の世界と自らが実際に経験している世界との著しい違いに戸惑っていた。

(2)「外国語の本を早く読むことはできなかったから……」

・『読書術』(1962年)では、高等学校時代に「一日一冊主義」を実践し、その後廃したとある。「汝は寢床で……」と問いかけたのも、『読書術』では加藤となっている。

¹⁴ 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」85頁。

(3) 「寝床では本を読むよりも大切なことが……」

・読書（濫読）だけでは得られない、実体験の重要性（読書のみを通して西洋を知ろうとした片山とかつての自分への皮肉？）。しかし「アルコス寝床にも、私の寝床にも、女はいなかった」（＝染みついた濫読の習慣は消せないことを暗示？）

【第6パラグラフ】影響を受けた教師②——日本文学

濫読はまた粗読に通じる。しかし駒場の高等学校の教室で、私はまた精読の実際にも立ちあつたのである。後に東京帝国大学の国文学科の主任となつた五味教授は、その頃まだ若くて、駒場の理科の学生のために国文の古典を教へていた。一字一句をおろそかにせず、正確であり得る限度まで正確であるとするその態度には、少壮有為の学者の迫力と緊張感があふれてゐた。おそらくその影響のもとで、後の国語学者大野晋や、国文学者小山弘志も育つたのである。私は国語や国文学の専門家にはならなかつたけれども、彼らを育てた厳格な学問的雰囲気からは強い印象をうけた。彼らの仲間が集つて、万葉集輪講の会をはじめたとき、私はただちにその会に参加した。子供のときから読み慣れた万葉集を、できるだけ正確に解釈するための方法を、私はそのときはじめて、五味教授の若い弟子たちから教つたのである。

(1) 五味教授について

・五味智英^{ともひで}（1908—1983）。『万葉集』研究の第一人者。1935年に東京帝国大学を卒業し、37年から一高で「国語・作文」を教へていた。五味の指導を受けて育つたのが、加藤の2年下級の^{すすむ}大野晋（国語学）・小山弘志（狂言研究）。

(2) 「彼らの仲間が集まつて、万葉集輪講の会をはじめたとき……」

・もともとは五味教授の『万葉集』講義についていけない学生に向けて、大野・小山ら「国文学会」のメンバーが中心となつて始めた会。毎週1回開かれ、「何十人という学生たちが、熱心に出席してゐた」¹⁵。

・加藤のほか、中村真一郎、白井健三郎も参加。中村によると、入学当時（35年）はまったく不人気だつた国文学は「時代の流行が一変」したことで急速に関心を集めるようになったが、一方で「古典を「超国家主義」宣伝の道具としようという一派の学者たちに反感」を抱いたといふ¹⁶。加藤が「ただちに」輪講の会に参加したのもそのためか。

(3) 加藤が万葉集輪講の会から受けた影響

・日本浪漫派への批判的視点……古典の正確な理解を根拠とした、恣意的な引用を行う日本浪漫派に対する批判。（例：「防人歌」の位置づけ）

¹⁵ 中村真一郎『戦後文学の回想』（筑摩書房、1963年）54頁。

¹⁶ 同上。

- ・日本文学史を研究する方法の獲得……「精読」の必要性の自覚。
- ・「日本語の詩型」に対する関心……『万葉集』の時点で日本語には複数の詩型が存在しており、どれを選択するかは詩人に任されているという認識。(マチネ・ポエティック運動の前提)¹⁷

【第7パラグラフ】

しかし駒場の三年間に私が経験したのは、寄宿寮の共同生活や何人かの教師たちとの接触ということではなかった。私はまた歌舞伎座を見物し、築地小劇場へ通った。歌舞伎座は羽左衛門、菊五郎、吉右衛門の時代で、私は立見席からむやみに広く空虚な舞台が、ただひとりの菊五郎の踊りのために、たちまちひきしまるのを見た。そこにはまさに圧倒的な「芸」があった。羽左衛門の歯切れのよい巻舌は、立見席までよく通って、私を酔わせた。助六、白浪五人男、夕霧伊左衛門……主人のためにわが子を犠牲にする歌舞伎の侍に私は一片の同情ももたなかったが、女に惚れこみ、けんかに強く、権威に反抗する気配をどこかに潜めた遊人や泥棒の主人公を、私は好んだのである。おそらく私自身が女を知らず、けんかに弱く、権威に反抗するいかなる行動もとったことがなかったからかもしれない。とにかく羽左衛門の助六の啖呵は——それを聞くと私の全身には戦慄に似たものが走り、文字通り息がつまった。先代梅若万三郎の舞台を除けば、およそ日本語の科白から、それほど直接に感覚的な強い衝撃をうけたことは、一度もない。それはいくらか祖父の古い蓄音機の底から溢れだして来て子供の私を魅惑したカルーソーの詠唱の印象に似ていた。科白の意味などはどうでもよかったし、いわんや芝居のすじは問題ではなかった。そこにはただ役者の声と化した劇的感動があった。

(1) 「私はまた歌舞伎座を見物し、築地小劇場へ通った」

- ・一高在学中には映画演劇研究会に所属。7本の映画評と4本の芝居評を学内雑誌に寄稿した。芝居評はすべて新劇にかかわるもので、日本の伝統演劇には触れていない¹⁸。
- ・加藤より23歳年長の林達夫は、一高在学中に「歌舞伎劇に関するある考察」(1918年)を発表。「歌舞伎劇はわれわれを徳川時代につなぐ唯一の橋梁である」から、「この古き「美」の芸術をすてなければならぬ」と宣言した¹⁹。しかし加藤は世代差もあって、「歌舞伎か、西洋文化か」の選択を迫られずに済んだ。

(2) 「歌舞伎座は羽左衛門、菊五郎、吉右衛門の時代で……」

- ・役者の個人名(十五代目市村羽左衛門、六代目尾上菊五郎、初代中村吉右衛門)を挙げて、彼らの「芸」を賞賛(新劇については役者名を挙げない)。

¹⁷ 加藤周一「中村真一郎、白井健三郎、そして駒場」、118頁。

¹⁸ 鷲巣力『「加藤周一」という生き方』(筑摩書房、2012年)198ページ。

¹⁹ 林達夫「歌舞伎劇に関するある考察」『林達夫芸術論集』(講談社文芸文庫、2009年)79頁、初出1918年。

・「歌舞伎は日本の世界に誇るべき舞台芸術だ、などというのは、おそらくろくに芝居を見たことのない国際文化交流の専門家のいいだしたことであろう。舞台芸術は、役者の声と身体で成り立つものである。役者に名人がいれば、歌舞伎は舞台芸術になるだろう。役者に名人がいなければ、世界に誇ろうと誇るまいと、芸術ではない」²⁰

・「科白の意味」や「芝居の筋」については、江戸の特殊な価値観の産物としか感じられず、共感しなかった。

(3) 「先代梅若万三郎の舞台を除けば……」

・加藤が能楽を見るようになったのは1943年以降のこと。初代梅若万三郎は「青春」の章にも登場する。

・Enrico Caruso (1873～1921年) はイタリアのオペラ歌手。レコード録音を盛んに行ったことでも知られる。加藤の祖父はこうしたレコードを多く所有していた。

【第8パラグラフ】

築地小劇場の舞台には、役者の身体や声の代りに、科白の意味があり、登場人物の性格や立場や心理があった。「どん底」、「桜の園」、「北東の風」、「火山灰地」……しかし三〇年代末の「新劇」の舞台については、文献によって容易にその詳細を知ることができるだろう。ここではそのとき築地小劇場の周辺に軍国主義の波がおしよせてきていたということ、それだけに劇場のなかには、連帯感とまではゆかぬにしても、反時代的な精神において舞台と観客との間に一種の暗黙の了解が感じられたということ、私にとってはそもそもはじめから、芝居見物とはその暗黙の了解を見ず知らずの観客と共有する経験にほかならなかったということを誌しておけば足りると思う。その時以来芝居見物は、私の道楽の一つ——すなわち私の人生の一部になった。私はその後西洋諸国をわたり歩いて、各国の芝居を見るようになったが、それは私がすでに歌舞伎座と築地小劇場で芝居というものを発見していたからであって、芝居とは何であり得るかを西洋で発見したからではない。

(1) 「築地小劇場の舞台には……」

・新劇を通して加藤は「科白の意味」や「登場人物の性格や立場や心理」といったものの意味（ドラマツルギー）を学んだ。一方、演技にはあまり感心しなかった。

・当時の築地小劇場はプロレタリア演劇運動の拠点であり、時代の波にもまれる人々を描いた作品が演じられた。加藤はここで挙げられている作品のほか、「アンナ・カレーニナ」「新撰組」「春香伝」「土」「黴」「秋水嶺」「釣堀にて」の劇評を『向陵時報』に発表²¹。

²⁰ 加藤周一「野村万蔵の芸」『加藤周一著作集』11巻（平凡社、1979年）221頁、初出1965年。

²¹ 鷲巣力『「加藤周一」という生き方』198頁。

(2) 「連帯感とまではゆかぬにしても……」

・築地小劇場には警察が監視に来ており、観客はそのことを承知で来ていた。そのため劇団と観客のあいだには一種の同志的關係が成立²²。

・演劇は観客に向かって語りかけ、観客がそれに応じることで成立する、と加藤は考える。「関心の薄い観客の前では、芝居は死にますね」²³。

(3) 「その時以来芝居見物は、私の道楽の一つ——すなわち私の人生の一部になった」

・加藤らしい逆説的な表現によって「芝居見物」(＝連帯感の確認) のもつ意味の大きさを述べる。戦時中の加藤は能楽やピアノ演奏会に出向き、そして戯曲の執筆(「トリスタンとイゾーとマルク王的一幕」1944年)を行った。背景には連帯感を求める心情が存在。

【第9パラグラフ】

私が西洋で発見したのは、芝居の世界ではなくて、絵画と彫刻、またおそらく建築の世界であったろうと思う。私はその頃日本の美術を、おそらく京都にあるいくつかの庭園を除いて、ほとんど何も見ていなかった。狩野派の襖絵は、そもそも興味をひかなかったし、上野の油絵の展覧会は模倣の展覧会にすぎず、日本の建築家は、戦後に展開した創造的な仕事を、まだほとんどはじめていなかった。そして何よりも両大戦間の東京の文化は、造形的な世界の意味を、絶えず強調してつきつけてくるものではなかった。たしかに桂離宮はあった。しかし桂離宮の意味を一九三〇年代に発見したのは、バウハウスとブルーノ・タウトを生んだ西洋の文化であって、東京の文化ではなかった。私はその東京の文化のなかで暮らしていたのである。

(1) 「私が西洋で発見したのは……」

・フランス留学(1951～53年)を通して造形美術の世界を発見。

・絵画や彫刻、建築はバラバラに存在するのではなく、ひとつの文化から発した「外在化された精神」であって、それらは「ひとつの統一的な形をなしている」というのが加藤の立場²⁴。この立場から見れば、日本の西洋絵画も建築も文化から切り離された技術に過ぎない。

・「その頃」(留学時)と「両大戦間期」(戦前)の話が混在して紛らわしい。

(2) 「しかし桂離宮の意味を一九三〇年代に発見したのは……」

・「私は、フランスにおいて、歴史的な芸術がその重要な一部分として知的世界の全体に密接に組みこまれている社会を見た」²⁵。一方日本の近代知識人は、日本文化を考える際に古い造形美術を引き合いにだす習慣を持たない。

²² 加藤周一『過客問答』(かがわ出版、2001年)235頁。

²³ 同上、242頁。

²⁴ 加藤周一「中世」『続羊の歌』(岩波書店、1968年)82頁。

²⁵ 同上、95頁。

・バウハウスは現代のモダニズム（合理的・機能的な美の追求）建築の源流とされる美術学校のこと。Bruno Taut（1880～1938年）は1933年に来日したドイツ人建築家。彼が桂離宮を激賞したことは桂離宮ブームの引き金になったとされている（異論あり）。

【第10パラグラフ】

しかしピアノ音楽は大いに私を惹きつけはじめていた。それはおそらくピアノをたしなんだ片山教授の影響によるよりも、むしろ同級の二人の友人の影響によるものだっただろう。彼らは私を浪漫派の音楽の方に導き、私たちはしばしば三人で、または二人で、レオニード・クロイツァーや原智恵子や井口基成の演奏会へ出かけた。その頃フランスから帰ってきたばかりの草間加寿子（後の安川加寿子）の最初の演奏会を聞いたときには、私たちの耳には全く新しかったその演奏様式に興奮し、寄宿寮へ帰ってから夜おそくまで、シナそばをすすりながら、とりとめもなくその話をつづけていた。私たちはまた聞いたことのない音楽への好奇心にかられて、特別の喫茶店へ出かけることもあった。〔中略〕その喫茶店の内側には、異様な雰囲気があり、煙草の煙の青くたちこめる中で、せまい椅子にこしかけた青年たちが、あるいは眼をつむり、あるいは放心したように視線をあらぬ方に向け蓄音機から流れて来る音に注意を集中していた。話をする者はほとんどなく、給仕の娘たちは珈琲をはこびながらもほとんど忍び足で歩いていた。

(1) 「同級の二人の友人の影響」

・ひとは同級生の橋本謙（のちの皮膚科学者）。『青春ノート』には橋本とレオ・シロタの演奏会を聴きに行ったという記載がある²⁶。ピアノだけでなく、新交響楽団（NHK 交響楽団の前身）の定期演奏会にも足を運んだ。

(2) 彼らは私を浪漫派の音楽の方に導き……」

・複数のピアニストの名前を挙げ、彼らの演奏に感銘を受けたことを示す。ドイツ系の亡命ユダヤ人であるクロイツァーを除けば、フランス留学経験者（井口基成・原智恵子）ないしフランス育ち（草間加寿子）の名前が並び、正確性を重んじるドイツ流のピアノ演奏から表現力を重んじるフランス流のピアノ演奏へと大勢が移っていく時代像を反映している。

・ただし当時の加藤は演奏技術に対する自らの理解は（友人よりも）浅いと感じており、ピアノ演奏を本格的に論じるには至らなかった²⁷。

(3) 「特別の喫茶店」

・おそらく銀座にあった「ダット」という音楽喫茶²⁸。

²⁶ 加藤周一「日記—14. 12. 18（月）」『加藤周一青春ノート』（人文書院、2019年）。

²⁷ 同上。

²⁸ 橋本謙「高校時代の加藤周一」『加藤周一著作集 月報3（第6巻付録）』（平凡社、1978年）。

【第 11 パラグラフ】

その頃の私が、浪漫派の音楽、殊にショパンのピアノ曲のなかに何を感じていたかを、いうことはむずかしい。しかしそれは、思い出すことがむずかしいからでは決してない。あまりによく思い出すことのできる経験を裏切らずにそれを言葉におき代えることが、むずかしいからである。芸術という言葉によって説明されるものではなく、私にとって芸術という言葉の説明するもの、実に抵抗し難い力で私の感情をかきたてながら、しかもその感情を超えようとするもの——その感情は、ヴァーグナーの楽劇の破壊的な情熱と陶醉からは遠く、またモーツァルトのピアノ曲の透明な喜びからも隔っていて、はるかに身近かな、打明け話に似た一種の親密さのなかにそれ自身を包みこみながら、心理的な起伏に富み、期待から焦燥へ、ためらいから情熱へ、甘美な憧れからきらきらと輝く束の間のよろこびへ、移りゆき、ゆれ動き、遂に消え去ってゆこうとするものである。その頃の私は死を怖れていた。真夜中に突然、自分自身と周囲のすべてが消え去ってしまうという観念に捉えられると、私は寢床のなかで恐怖のあまり冷汗をかき、ながい間眠ることができなかった。しかし私は生きることにより何らかの積極的な意味をみとめていたのではない。意味をみとめていなかったから、生きることによりべからざる執着を生じたのかもしれない。その執着の中心——また少なくとも中心にちかいところに、あの低音部の和音の渦のなかから浮きあがって来る限りなく切実で限りなく繊細な旋律があったといえるであろう。とにかくショパンと浪漫派をとおして、音楽は私の人生のなかに介入して来るようになった。それは私と音楽との全く新しい関係のはじまりであった。

(1) 「殊にショパンのピアノ曲のなかに何を感じていたか」

・「期待」と「焦燥」、「ためらい」と「情熱」、「よろこび」と「消え去っていく」恐れ。つまり矛盾する感情を同時に表現する点。これは加藤が寢床で感じていたこと（死への恐怖と生への執着）に対応。

・『青春ノート』にはショパンへの言及が 20 回あり、本格的にショパンを論じたいという意思を持っていたことをうかがわせる。しかし果たせなかった。

(2) 「芸術という言葉によって説明されるものではなく……」

・すぐれた芸術（音楽）作品とは、それぞれの方法で「芸術（音楽）とは何か」という問いに答えたものである、というのが加藤の考え。

「音楽家は——そこが音楽史家とちがうところだろう、と思う——、どうしても「音楽は一なり」といわなければならない。〔中略〕「音楽」の普遍性とは、何であるか。それは一人一人の音楽家の音楽的体験の核心としかいいようのないものである」²⁹

・ヴァーグナーについては留学中の観劇を通して「陶醉」を味わい、組織的・合理的なドイツ文化の反作用として位置付けられることに。

²⁹ 加藤周一「小倉朗または現代の音楽」『加藤周一著作集』11 巻、357 頁、初出 1971 年。

(3) 「その頃の私は死を怖れていた……」

・幼年期の悪夢（「渋谷金王町」の章）を想起させる内容だが、その内容はある意味でありふれたもので、実体験であるように思われる。

・死への恐怖とそれへの抵抗を通して、自身の内面の奥底に何があるのかを発見。ただ母に救われるだけであった幼年期からの精神的な成長をうかがわせる。

【第12パラグラフ】

両大戦間の東京は、思えば不思議な街であった。そこには沢山の翻訳文学と、印象派以後の絵画の複製と、ドイツ浪漫派の器楽があり、それは日本の伝統的な文化を忘れさせるには充分で、西洋の文化を理解させるには不充分であった。私は多くの翻訳文学を読み、印象派とそれ以後のフランスの画家の名まえを覚え、不完全な再生装置と不十分な演奏技術とを通じて浪漫派の音楽を聞き、しかも印象派以後の絵画が西洋美術の小さな部分にすぎず、浪漫派の音楽が到底西洋音楽の全体を代表するものではないということさえも知らずに暮らしていた。また神道や儒仏の事については、ほとんど何の知識もなく、日本人の精神を長い間養ってきた観念の体系について全く無知でありながら、長い間祖先の身体を養って来たみそや米や豆腐をたべ、長い間日本人が歩いてきたあのぬかるみの道を長靴か足駄で歩いていた。古来の「淳風美俗」に従い、日常生活では、親しい一人の女さえも知らなかった。女については、わいせつな妄想を抱くと同時に、他方では途方もない憧れを抱いていて、そのどちらも現実の女のまえでは——たとえ喫茶店の娘のまえでさえも、全く役にたたなかった。臆病で、自尊心が高く、話しかけようとしても途方にくれるほど女の扱い方を知らず、女たちからは相手にされなかったので、激しい劣等感を抱いていた。そういう自分を、一時代の文化の戯画として、私自身がはっきりと意識したことはない。しかし私自身のなかの二番煎じのもの、不徹底なもの、あやふやで堅固でないものを、おぼろげながらも感じていないわけではなかった。その対策をみずから講じることが、その頃の私にできるはずはなかったろう。対策は、後になって、いわば外からやってきたのである。その第一は、医学であり、その第二は、太平洋戦争である。医学は知識の普遍性を保証し、太平洋戦争は日本社会の不確かな部分から私を切り離したので、あとには、その確かな部分を発見する仕事だけが残った。

(1) 「両大戦間期の東京は、思えば不思議な町であった……」

・輸入された西洋文化は暮らしかから切り離され、しかも断片的な輸入に過ぎない。

・伝統的な日本文化は生活のあり方に決定的な影響を与えているが、それを支える精神については忘れられている。

・こうした日本社会の中途半端さを、当時の加藤自身と重ね合わせている。西洋文化・日本文化の双方について中途半端な知識しか持たず、観念としての「女」を抱きながら、それを現実の「女」の扱いに結び付けることができないでいた。そうした自身を発見したのが一高時代の成果。

(2)「その第一は、医学であり、その第二は、太平洋戦争である」

- ・いずれも「外」からやってきた（問題意識をもって医学に取り組んだというより、否応なく取り組んだ医学が問題の解決策となった）。

- ・医学は物事を分析し因果関係を理解する客観的な方法であり、それによって得られた知識の普遍性を保証。それは日本社会や文化の分析にも適用可能だと考えた。

- ・戦争は日本社会の「不確かな部分」を浮き彫りにした（古典のいい加減な理解、スローガンの曖昧さ、西洋文化を学んだ知識人の「転向」etc）。

- ・しかし、不確かな部分を取り除いたあとには「確かな部分」が残るという。